「僕のおじいちゃん」

南林間小学校　六年三組　安藤　想来

僕のおじいちゃんは、三年前肺ガンで亡くなりました。その時おじいちゃんは六十三さいでした。僕は、おじいちゃんの初孫だったのでとても可愛がってもらいました。でもおじいちゃんは、肺ガンになってから約一年半病気と戦いました。そのときに福祉の人は、優しく介護をしてくれました。福祉の人のおかげでおじいちゃんの夢の東海道五十三次までも制覇できるほどに回復しました。しかもそのころ介護をしていたのは、福祉で働いていたおばあちゃんとお母さんが在宅介護をしていました。家族の力でおじいちゃんが回復したのかもしれません。なので家族の絆と福祉の力というものは、強いと自分がこの体験を得て、よくわかりました。おじいちゃんは、介護の人や、家族に見守られて亡くなったので、今は天国で僕たちを見守ってくれてると

20 × 20

想います。この上の想いますにも、意味があります。この想いは、僕の名前で、想いが来るという意味です。この作文でおじいちゃんに想いがとどくといいです。そして亡くなったおじいちゃんの想いを残された僕たち家族が大切に引きついでいきたいです。そして福祉という仕事は、人と人の想いをつなげる大切な仕事だと想いました。最後にいつまでもおばあちゃんに健康で元気にこれからも福祉の仕事にたずさわっていてほしいです。

「僕のおじいちゃん」わかくして亡くなってしまったけれどきっととても幸せだったと想います。